

「宝珠図 慈光寺実仲筆」について

岩佐 伸一

はじめに

江戸時代には職業絵師にとどまらず様々な身分の者が絵筆を執った。現在のところ近衛信尹の天神図や近衛家熙の「花木真写」など一部の作品を除いては、紹介や研究がされる機会は少ないが、公家も頻繁に絵筆を振っていた。嘉永三年（一八五〇）起筆の朝岡興禎『古画備考』は、第二巻と第三巻を廷臣に充て、主に絵筆を執った公家の略伝や画業、署名や落款を記す。「第三巻 廷臣 二」のうちには、七〇名近くの江戸時代の公家が載るが、同書には掲載されないものの作品が確認できる公家もあり、筆者は現時点では約一〇〇名の絵筆を執った公家の存在を知り、約二〇〇点の作品を確認した。朝廷では毎月の扇の調進をはじめ内裏の造営にかかる障壁画制作などの画事が多く行われ、それらには公家も関わっていた¹⁾。よって職業絵師との交渉が生じ、有職故事をはじめとする学芸に詳しい公家と、画技に精通した職業画人は互いに影響を及ぼしていたと考える。江戸時代の後期には、朝廷に関係した町方の絵師も多くいる。よって当時の職業絵師の画風形成や活動を考えるにあつてはある程度の意義があるのではない

か、また公家の絵画に特有の思想や表現があるのかもしれないのかなどへの関心から、筆者はそれらの調査を進めている。本稿では大阪歴史博物館に所蔵される慈光寺実仲の「宝珠図」を示し、その一端を紹介する。

「宝珠図 慈光寺実仲筆」とその類例

実仲は天明七年（一七八七）に生まれ、享和二年（一八〇二）に元服し、昇殿が許された。当時の官は勘解由判官、位は正六位上。その後、官職は大蔵大輔を経て左馬権頭となり、文久元年（一八六一）に七五歳で薨去した時には従二位の位階にあった。子興、花雲とも称した²⁾。実仲の生きた時代は政治的な変動の大きな時期であり、子の有仲は安政五年（一八五八）に起きたいわゆる八十八卿列参事件に関わっている。しかし実仲自身が政治的に大きな役割を果たしたことは聞かない。実仲が当主となった慈光寺家は、古くからの堂上家ではなく、元は地下官人の家であったものの、江戸時代になって三度極臈を勤めた功績により堂上家に取り立てられた。家職を神楽とし、家格は半家、公家の中では新しく成立した家のために新家、

天皇との関係は遠く外様の家とされた。管見では、同家においては実仲とその子有仲の二名の画作が確認できる。

さて現時点では二〇点ほどの実仲の絵画作品が確認できる。それらには有栖川宮織仁親王像などの人物画、除災機能があるとされた雷鳥図や岸駒を祖とする岸派に近い作風を見せる虎図などの鳥獣画、源氏物語の一場面を描く初音図、福富草紙の写しなどがあり、手がけた画題は多様である³⁾。師承関係は不明だが、『古画備考』には「在中ノ弟子歟」とあり原在中を師匠と推測している。岸派に倣った虎図、また四条派の松村景文らが多く手掛けた水月図に通じる表現を採る作品もあり、当時流行りの画風をさまざま手がけていたようだ。大原東野編『名数画譜』（文化七年〔一八一〇〕刊）には「一品当朝図」を寄せており、江戸時代中期に中国からもたらされた南嶺絵画の画題を知っていたことが確認できるとともに、版本への絵の提供からすると自らの作品が広く人の目に触れることを厭わなかったようだ。また『古画備考』の実仲の項目には松竹梅三幅対の款記と印が挙げられている。これには「奥御物」であった旨が付記されるため、徳川将軍家の所蔵品に実仲作品が含まれていたことがわかる。

本稿で紹介する「宝珠図 慈光寺実仲筆」（大阪歴史博物館蔵）は、紙本墨画で上部には絵と同様に実仲の筆で和歌による画賛が認められている。法量は縦九九・八センチメートル、横二六・四センチメートル、現在は掛幅装となっている。款記は「六十一叟 正三位實仲」とあり、「源實仲章」（白文方印）と刻まれた印一顆が捺される。款記に記された六十一歳との年齢からは、この作品が弘化四年（一八四七）に描かれた作品であることがわかる。

画面上部には次の通りの和歌が記される。なお翻字や読み下し、歌意は

鈴木洋保氏（書画家・書画史家、公益財団法人藤井齊成会評議員）による。

〔翻字〕（／は改行を表す）

年々に家の光／の／輝きて弥栄／行／あら玉の／春

〔読み下し〕

年々に 家の光の 輝きて いや栄え行く 新玉の春

〔歌意〕

歳年に、我が家に如意宝珠の輝いて、いよいよ栄えあることだ、この春のように

画面下部には大小の如意宝珠がひとつずつ、少し重なって描かれる。画面手前には小ぶりの宝珠が淡墨で描かれ、その外側の線は上部から反時計回りに円を描き、頂部には二重の弧が認められる。始筆部は鉤状を示し入筆時の筆圧の強さが現れ、円弧はかすれを見せるため一気に描かれたと見える。線の太さは均一ではなく若干の肥瘦が見られ、上部には火炎があらわられる。画面の幅いっぱいには描かれるもうひとつの宝珠は、下部から時計回りの運筆が確認でき、小ぶりの玉よりは濃墨で描かれる。上部にはやや淡墨で火炎が表され、頂部は水気の多い墨で塗り込められ、その下に弧線が引かれ、弧線の下にはわずかに隈が施されている。精緻さよりも運筆の速さを優先した、勢いのある宝珠図となっている。画賛とあわせて考えると、本図は年頭にあたり、家の栄えを願って描かれた図といえよう。宝珠の中には行年と位階、名からなる款記それに印があり、これらは大いに目立つ。還暦を越えた当時としては長寿の人物で、かつ正三位という比較的高い位を有する者であることが強調されているとみられる。これは実仲自身の誇示の可能性も否定できないものの、長寿と出世を果たした公家が

描いた宝珠図であることを重視した発注者の意向を反映した可能性も指摘しておきたい。それというのも公家の詠歌には、除災機能があつたとの報告があることによる⁽⁴⁾。具体的には田畑の虫除けを目的として和歌を用いたのだが、この事実を援用するならば、本図に認められた実仲の和歌にも何らかの効用—この場合には招福などが想定される—が期待されていたとは考えられないだろうか。公家という身分から派生する機能が期待され、その機能が本図にも付与されていることを強調するために、目立つ位置に款記が記されたとも思えるのである。

宝珠を画題とした絵画は数多く、摩尼宝珠曼荼羅のようにそれ自身が信仰の対象となる作品もあれば、新年にふさわしい景物画としての宝珠図もある。後者には、本図のように墨一色で宝珠を描いた江戸時代の作例があり、実仲と作風が近くかつ同時代の円山派や四条派の絵師たちが数多くの作例を残している⁽⁵⁾。その表現はほとんどが墨画であり、職業絵師だけあつてその線は比較的均質で整っている。宝珠だけではなく、梅や稚松が配された新年にふさわしい図様となっている作品、また逃げる鬼が配され福を呼ぶ宝珠の霊験あらたかな様を表す作品もあり⁽⁶⁾、宝珠図がさまざまなバージョンを持ち、需要の多くあつた画題であることを物語っている。また款記には元旦の試筆であることが記される作品が複数あり⁽⁷⁾、職業絵師にあつては吉祥性の豊かな宝珠は書き初めの画題として好まれていたようだ。

では、実仲と近い時代の公家に目を転じるとどうか。管見に及んだ作例は、次のとおりである。

- ① 宝珠図并題詠 大原重徳筆 京都大学附属図書館蔵⁽⁸⁾
- ② 宝珠図 大原重徳筆 個人蔵⁽⁹⁾

③ 玉図 千種有任画 千種有功、千種有文賛 京都府蔵(京都文化博物館管理)

④ 宝珠図自画賛 千種有功筆 個人蔵

①と②は、日米修好通商条約の勅許に反対したいわゆる八十八卿列参事に加わり、また孝明天皇が幕府への攘夷決行を迫った際の勅使を勤めた大原重徳(一八〇一—七九)の自画賛作品である。その画賛は、表記は異なるものの同じ和歌であり、①を挙げるならば「此玉は この年月日 真心の 凝かたまりし 玉にさりける」と記される。これによれば描かれている宝珠は、真心の固まったものであるとなる。さらに踏み込めば、幕末の政治的な局面で表立った動きをした重徳の尊皇攘夷の心持ちを象徴的に表した作品とも考えられよう。双方ともに紙本墨画で、墨の濃淡に差はあれどもいずれも運筆は速い。③は歌人として名のあつた千種有功(一七九六—一八五四)、その子で公武合体派の公家、いわゆる「四奸二嬪」のひとつりとして名の挙がった有文(一八一五—六九)の二人が和歌画賛を記し、有功の孫で八十八卿列参事件また慶応二年(一八六六)の二十二卿列参事件に加わった有任(一八三六—九二)が宝珠を描く。宝珠の両側は、画面からはみ出しており、近接的に描かれている。その描線はかすれを見せた速い運筆によるため、勢いのある図となっている。画賛の歌意は、有功が「玉に喩えられる人の心、想う心も七年というが、せいぜい三月位のものであろう。想う人と一つという心の玉にも浮気心が起こることだ」、また有文は「人は皆、手から手へとこの玉を受け継いで、それぞれ生きる道は違っても、その光の御恩を想うことだ」となる⁽¹⁰⁾。④は実見しておらずかつ鮮明な画像が入手できなかったため、その存在を示すのみにする。なお図様は熨斗の上にひとつの火炎宝珠が表わされた墨画であり、上部には

はなく、職業絵師の手になる宝珠図と同じく吉祥性のみを表出した作品である。実仲が画業においてはものの形を絵画として提示する以上のことを目指さなかったのかどうかは、本図の検討だけでは判じがたい。その真の作画姿勢を知るためには彼の画業を広く検討する必要がある、それは公家が手がけた絵画の性格を明らかにすることにも繋がると思われるため、今後に関心を寄せていきたい。

註

- (1) 江口恒明「禁裏御用と絵師の「由緒」・「伝説」および五十嵐公一」安政の御所造営と文久の修陵」(五十嵐公一・武田庸二郎・江口恒明著『天皇の美術五 朝廷権威の復興と京都画壇』吉川弘文館、二〇一七年)には、公家が御所造営の際に御用掛として障壁画の作成に関与したことが記されている。
- (2) 大原東野編『名数画譜』(文化七年(一八一〇)刊)の附録には「慈光寺大藏大輔実仲卿 字謀号子興」、「恵比寿図」(個人蔵)の款記には「正三位花雲賛画」とある。
- (3) 「織仁親王御画像」は宮内庁書陵部所蔵、「雷鳥図」は個人蔵、「虎図」は京都府蔵(京都文化博物館管理)、「源氏物語絵 初音図」は早稲田大学図書館蔵、「福富草紙」はフランス国立図書館蔵。
- (4) 小野佐和子「駿河原宿帯笑園の訪問者についてI—東海道を往来する人々—」(『千葉大学園芸学部学術報告』五一号、一九九七年)
- (5) 佐々木丞平、佐々木正子編著『古画総覧 円山四条派系』の第一巻から第五巻までを参照した。
- (6) 『古画総覧 円山四条派系 四』に掲載される呉春筆「萬歳玉画賛」(作品番号二〇四三)、『古画総覧 円山四条派系 三』に掲載される松村景文筆「宝珠若松図」(作品番号三三三七)、同書に掲載される松村景文と森徹山の合作「福八内」(作品番号一四二〇)、松村景文画具春讚「宝珠、鬼図」(作品番号

一五〇三)が例として挙げられる。

- (7) 『古画総覧 円山四条派系 一』に掲載される円山応挙「宝珠図」(作品番号一〇一五)、同「宝珠図」(作品番号一六八)、『古画総覧 円山四条派系 三』に掲載される松村景文筆「鼠宝珠」(作品番号一三四四)、『古画総覧 円山四条派系 四』に掲載される呉春「玉図」(作品番号三七四)、横山清暉「宝珠図」(作品番号三一五五)などが一例として挙げられる。
- (8) 平成二九年八月三十一日現在、次のアドレスに画像が掲出されている。
<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/ishin/kanren/doc/shoshi/00808.html>
- (9) 平成二九年八月三十一日現在、次のアドレスに画像が掲出されている。
<http://eiketsunosho.seesaa.net/article/424711936.html>
- (10) 「③ 玉図」の歌意は鈴木洋保氏による。
- (11) 「石田小右衛門画像」(個人蔵)に記される。同資料は、池田市立歴史民俗資料館編『なにわのスーパーコンサルタント—大根屋小右衛門の財政改革』(平成一七年)に所収される。

本稿を記すにあたっては、木土博成氏(大阪歴史博物館学芸員)、鈴木洋保氏、森道彦氏(京都文化博物館学芸員)の協力を得ました。記して謝意を示します。

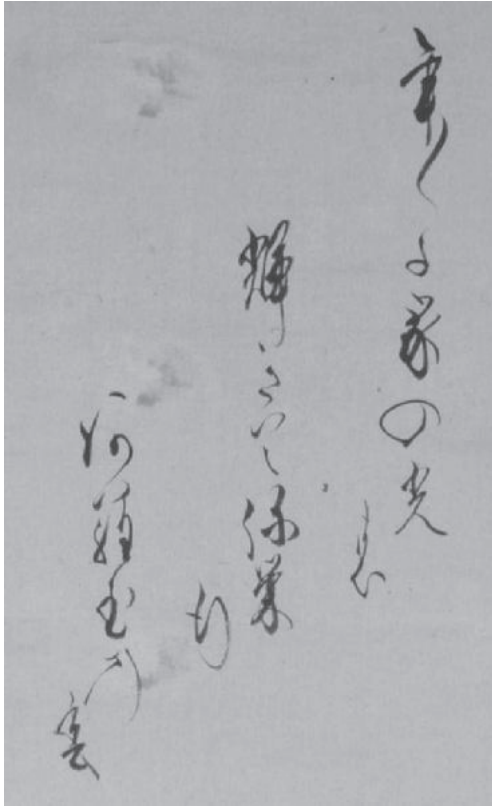


図2 「宝珠図 慈光寺実仲筆」和歌画賛部分



図1 「宝珠図 慈光寺実仲筆」全図

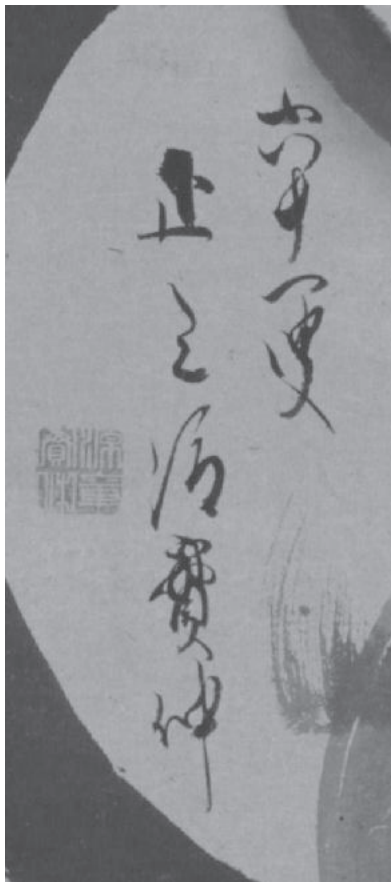


図3 「宝珠図 慈光寺実仲筆」款記印章部分